ISSN　0582−4478

京都大学附属図書館報

静脩

2001年3月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 37,　No. 4

フォン・シーボルトと『ファウナ・ヤポニカ』

田　隅　本　生

最近、京都大学附属図書館の電子図書館システムに西洋の古典『ファウナ・ヤポニカ』、いわゆる「日本動物誌」が収録されたよしで、同システムとその利用者のためにひとまず祝意を表したい。この機会に、当の書物の輪郭と背景を簡単にご紹介しよう。

昨年、西暦 2000 年は、在日オランダ大使館と日本文部省などの企画で“オランダ年”とされ、同国をめぐる何百という催しが全国各地で行われた。遠い昔の1598年６月、５隻のオランダ帆船団が東洋を目ざして同国から出帆し、西回りで航海した。その結果、ただ１隻「リーフデ号」(De Liefde ＝愛)だけが乗組員の８割近くを途中で失いながら、かろうじて豊後の海岸（大分県臼杵市）にたどり着いた。1600年４月のことで、これが日本とオランダの最初の出会いであった。天下分け目、関ヶ原の戦いの５か月前の出来事である。

広く知られているとおり、同船の英国人航海士ウィリアム・アダムズ（三浦按針）や船員ヤン・ヨーステン（東京、八重洲の語源）らが発足当初の江戸幕政に与えた影響をはじめ、この船の来着が日本の近代化を刺激した効果の大きさは測り知れない。

“オランダ年”は、この画期的な出来事から数えた日本オランダ修好 400年を記念するものだった。無数の行事のなかには、長崎と東京の公立博物館で開かれた大規模な記念展覧会（長崎では「大出島展」）もあった。そこでは、フォン・シーボルトの膨大な収集品の一部がオランダからほぼ 170年ぶりに里帰りし、国内所蔵の関係物品とともに合計 450点も展示されて、来観者に強い感銘を与えた。それより前、1988年にも日蘭修好 380年（オランダ商館平戸開設からの年数）を記念した展覧会「シーボルトと日本」が京都、名古屋、東京の三つの国公立博物館で開かれたことがある。これは、シーボルト収集の人工物や天産物が日本国内で展観された最初の催しであった。

さて、フィーリップ・フランツ・フォン・シーボルト(Ph. Fr. von Siebold)は一言でいえばドイツ出身の医者だったが、到底それだけにとどまる人ではなかった。念のためフォン・シーボルトの公的経歴を復習してみると、彼はフランス革命進展中の1796年、ドイツはバイエルンのヴュルツブルクで出生。同地の大学で医学を修めたのちオランダ国王の侍医になる。が、東洋への興味を抑えがたく、同国陸軍の軍医に転じ、1823年、オランダ領東インド（現インドネシア）

『ファウナ・ヤポニカ』の4巻セット（京大理学部動物学教室所蔵）

の中心地ジャワ島のバタヴィア（現ジャカルタ）へ渡航。たまたま好機があって移動、同23年中に長崎に到着し、出島のオランダ東インド会社商館に医員として勤務。26年には５か月間、商館長に随行して江戸幕府へ参上。ところが、28年帰国する際に起きた“シーボルト事件”のため幕府から国外追放の処分をうけ、翌29年ヨーロッパへ退去。やがて国際情勢の変化による追放解除にともない、59年子息とともに再び長崎へ来航して滞在し、62年、追加の仕事を終えて帰国。第二次日本旅行で入手した資料を整理していた1866年、フォン・シーボルトは故国のミュンヘンで死去、享年70歳。明治元年の２年前のことだった。

こうした表向きの略歴には、シーボルト事件の汚点のほかには特に注目すべきものはない。開国まで200年以上も存続した出島のオランダ商館にはたぶん多数の医師が交代で勤務しただろう。まれには動植物の採集で知られる人もいた。そのなかでシーボルトが抜群によく記憶されているのは、彼が商館員のための医療業務のかたわら、６年ほどの短い滞在期間中に大量の吸収と寄与をした、量質ともに信じがたいような“副業”のためである。

彼の副業には大きく分けて二つの要素があったと言える。その一つは、彼が日本人へのサービスに意欲的だったこと。一般患者の診察のほか、名声を聞いて遠近から集まってきた門人へ蘭学、つまりオランダ語、西洋医学、科学全般などの講義を毎週１回行ったこと、天然痘予防の“種痘法”を日本人に初めて教えたこと、などが伝えられている。シーボルトは出島着任の翌年、長崎奉行から特別の許可を得て郊外の鳴滝に学塾兼診療所「鳴滝塾」を開設し、そこでこれらの仕事に当たった。この塾は蘭学の重要な拠点になり、高野長英ら50人を超える蘭学者や通詞を育てたと言われている。

副業のもう一つの要素は、日本のあらゆる分野にわたる人工産物と、天産物つまり動植物の標本をできるかぎり収集し、それらを何度にもわたって本国へ送ったこと。そうした物品の輸送だけに一隻の船が当てられたこともあったという。ただし、シーボルト自身が駆けまわって物を入手したのではなく、彼が診察費を受け取らなかったため患者側が自発的に物品を贈ったのだとも言われる。天産物の収集と発送には、ドイツ人薬剤師兼助手の H. ビュルガー、生物・人物・風景などの写生にはビュルガー自身と、シーボルトが頼りにした有能な洋風絵師、川原慶賀の貢献が大きかった。とくに慶賀の作品は数が非常に多く、シーボルトの偉業は彼らの協力の上に成り立っていた。

受け入れ側のオランダでは、アジアから大量の民俗的・博物学的な品物が続々と到着するのに押され、同国最古の大学があるライデン（レイデン）に国立民族学博物館が設立された。シ

ーボルトの日本文物はまとめてそこに収蔵されることとなり、これらは後年、彼が帰欧後に執筆・出版した大著『NIPPON』（後述）の裏付け資料になった。

他方、おびただしい日本産動物の標本はすべて、同市内に以前からあった国立自然史博物館に納められた。近年、シーボルトらの動物標本の調査に携わっている甲殻類専門家の山口隆男氏（熊本大学）は、彼らの収集物に三つの特色を認めている。①一つの種類について幼体から成体まで手に入るかぎりなんでも集めたこと、②日本語名を各種ごとによく記録し、種類によってアイヌ語名も調べたこと、③珍奇な種類を重視するのではなく、平凡な種類も平等に集めたこと。これらは本来、学術的博物館のコレクションが満たすべき基本条件であると言える。こうして、ライデンの二つの国立博物館は、江戸時代後期の日本の状況を物質面で集中的に保存する宝庫になり、その整理や研究は今なお十分には終わっていないよしである。

さて、シーボルトが本国へ送った動物標本はアルコール漬けのもの、乾燥した毛皮や剥製、さらした骨や組み立てた骨格などであった。これらを受け取った当時の自然史博物館長 C. J. テミンクは動物分類の専門家で、この人を中心とする３名の動物学者（下記）が日本標本の調査に当たった。そして、シーボルトが帰欧した後の1833年より研究成果の刊行がアムステルダムで始められ、1850年まで続けられた。これらの出版物の総タイトルが『ファウナ・ヤポニカ』（FAUNA JAPONICA＝日本の動物相）である。

この書物（以下、FJと略す）は「日本動物誌」とも呼ばれるが、この日本語名は通称であって正式の書名ではない。邦訳書はむろん存在しない。また「シーボルト」の名が冠せられることも多いが、彼は標本の収集、データ記録、発送、研究委託などをした責任者であって、著者ではない。シーボルトは動植物に強い興味と知識をもっていたにしても、博物学的な鑑別、分類、命名などの専門家ではなかった。

ところで、多数の分冊でできたFJは、実はとてつもない本なのである。まず人を驚かすのはその判サイズで、各ページの大きさは縦 370ミリ、横 295ミリもある。用紙（劣化を生じていない）にも相応の厚みがある。平均すると25ページ程度のこうした分冊が17年間にもわたってぱらぱらと刊行され、結局42分冊、本文だけで合計 1,057ページになった。そして本文頁の間に、カラー写真も及ばないほど精緻で大きな各動物の写生石版画（単色 92、彩色 311）が挿入されている。その多くは上記の絵師、川原慶賀の作だとされるが、西洋人の署名の見える図もある。全体としてFJは動物図鑑の最初かつ超特級の手本だったのであり、美術的な画集と言ってもよいほどのものである。

このようにばらばらな形で出版された書物は当然、完全本にはなりにくい。運よく全ての分冊が揃った場合には、少数の巻にまとめて頑丈に製本され、分割不可のセットとされるのが普通であったらしい。わが国では、国立国会図書館にやや外装の傷んだ５巻セットが収蔵されており、京都大学には４巻セットとして保存されている（1907年、医・生理で受入、22年、理・動物へ移管）。昔、おそらくヨーロッパで造られた合本が古書として購入されたものと推定される。

ちなみに、国会図書館本に基づいた極めて忠実な復刻版が附属の解説書１巻（酒井ら５氏の分担執筆）とともに、1976年に部数限定で出版されたことがある（講談社）。

『ファウナ・ヤポニカ』の分冊はもとは大きなペーパーバックであった。京都大学本を見ると、合本の際に剥がされた各分冊の表紙が何枚もまとめて合本の巻末に綴じこまれている。表紙の次のトビラは現今と同じく書物全体を代表するもので、文字の背景に、十二支の動物や、麒麟など５種の瑞祥動物を表した極めて東洋的な絵図がある。そこに、次のような書名と副題

がちりばめられている（すべてラテン語）。

ファウナ・ヤポニカ
すなはち
至高なるオランダ東インド帝国領を領有せる
上官諸氏の命令と後援により企画されたる
日本旅行において1823－1830年に収集し、
注釈、観察記録、及び素描により
解説したる　諸動物の記録

中央には“Ph. Fr. de［= von］Siebold”の大きな装飾文字があり、次に C. J.テミンクと H. シュレーゲル（脊椎動物担当）、および W. ド＝ハーン（無脊椎動物担当）の共同研究により完成されたことが明記されている。下部には“奥付”がある。

国王の援助により出版さる
オランダのライデンにて
1833年
アムステルダム　J. ミュラー社にて
（刊行年は分冊により異なる）

また各巻頭には、当時の西洋学界の気風を暗示する全頁の大きな献辞が置かれている。

至高なるオランダ東インド帝国領を
統治せる　卓抜にして著名なる
諸氏へ、また　オランダに
栄ゆる　芸術と科学の
諸協会へ　捧げらる

さて、肝心の内容のことだが、京都大学所蔵の４巻本セットは無脊椎動物の１巻「甲殻類」と、脊椎動物の３巻「哺乳類・爬虫類」「鳥類」「魚類」から成っている。ここでいう“爬虫類”は旧式の分類方式によるもので、現今の“両生類”の全てを含んでいる。当時はダーウィン流進化論が確立するより30年以上も前であり、生物の分類は系統関係を問題にせずに形式的な類別や命名を事とするものだった。他方、ド=ハーンによる無脊椎動物の巻はフランス語の長い序論を除いて全部ラテン語、テミンク／シュレーゲル執筆のその他の３巻はすべてフランス語で書かれている。当時、学術的な文書はまだ昔ふうに権威ある共通語だったラテン語（または仏語）で書かれることがあり、今日ではほとんど読解不能になっているのは誠に惜しいことである。

限りなく多様な無脊椎動物に関して、FJで取り扱われたのは甲殻類だけである。著者のド=ハーンは執筆の途中で病没し、後継者がいなかったからだと言われている。難解なこの巻は別として、その他の巻での種類の取り扱いはほぼ同様らしい。多くの動物が近似の種類ごとに次々に列挙され、まず外形の特徴が描写され、シーボルト自身の記録などに基づいた関連事情が述べられる。そして、未知の新種と判断されたものには、“二名法”によってラテン語式の新しい種名がつけられた。

哺乳類の部を例にとれば、所載の陸産種は54種で、そのうち記述のみは26、付図を伴う記述は28ある。いま日本産として知られている 120余種には後年の研究により種名が変えられたものが多いが、13種はシーボルト標本に基づいてテミンクまたはシュレーゲルが初めて与えた名をそのまま、もしくは一部を維持している。例えば、日本で強く関心がもたれる“ヤマイヌ”（Jama-inu、いわゆるニホンオオカミ）は、テミンクがシーボルト由来の剥製と骨格に基づいてFJより前にある学術誌でオランダ語で発表し、大陸産オオカミ *Canis lupus* とは別種として“*Canis hodophilax*”と命名していたものだ。幻の動物であるだけに異説があるけれども、この種名は今も有効とみられている。テミンクはFJでこう書いている。「新種の野生の犬、すなわち日本人がヤマイヌと呼んでいるものは、全体の形でも毛並みの特徴でも、生活様式でも、欧州諸国の狼と比較しうるものである。……日本の狼は欧州の狼より小さいのみならず、立ったとき、体長に比べての体高が欧州の狼より小さい。……」この箇所には、剥製によく似た全頁大の全形彩色図が付けられている。

ちなみに、“ヤマイヌ”の剥製と頭骨は日本人にとって、ライデンの自然史博物館標本のなかでは最も気がかりなもので、戦前以来幾人も

の研究者やジャーナリストが現地を訪れてこれらを直接調査している。その剥製は1988年の日蘭修好記念展の際に日本へ里帰りして２か所の博物館で展示され、参観者に強烈な印象を与えた。このように、最初の命名の基になった掛け替えのない“基準標本（タイプ）”がライデンの自然史博物館には数多く保存されており、FJで記述されて今も生きている多くの種名がそれらと緊密に結びついているのである。

しかし他方、彼の本当の興味は日本の人文的な諸要素に向いていたように思われる。彼が弱冠30歳前後の数年間に蓄積した資料に基づき、帰国後にドイツ語で執筆出版した大著『日本　日本とその隣国、保護国 ── 蝦夷・南千島・樺太・朝鮮・琉球列島 ── の記録集．日本とヨーロッパの文書および自己の観察による』（1832－51、ライデン）は、“江戸後期日本のすべて”ともいうべき畢生の集大成である（有名な既訳書『江戸参府紀行』はその中の一章）。先年これが９巻本（1977－79、雄松堂）として全訳出版されたのは実に有意義なことであった。これまで、シーボルトをめぐる無数の研究のほとんどがこうした民族学的な面に向けられてきたが、それは不当なことではない。しかし、この名著もその背景をなす膨大な物品も、過去の世界を記録した歴史的資料以上のものではない。事実誤認もあっただろう。

それとは質を異にして、『ファウナ・ヤポニカ』とシーボルトが集めた動物標本は単なる文化遺産にとどまらず、ある意味では今でも“生きて”いる。ちょうど我々の本籍地のように、日本人研究者をそこへ回帰させるのだ。生物はすべて時代とともに進化し変形するものだが、現在の生物はまだシーボルトの時代から変わっていない。彼自身の意図とは関わりなく、日本産の現存動物を研究する人には、場合により、国際動物命名規約（新版が2000年１月発効）に従って、FJの記載やライデンの基準標本を調べる必要が生ずるのである。

それはともかく、シーボルトと協力者らが当時の厳しい環境条件を突破してなしとげた仕事は、凡人の常識をはるかに超えるものである。仮に現代において、このような人物がもろもろの情報技術や電子図書館を駆使するとすれば、結果はどうなるだろうか。── この人の生涯と事績を見つめるとき、今さらのように一個人の力の偉大さを思わずにはいられない。

（たすみ　もとお：元理学部助教授）

附属図書館公開展示会について（予告）
── 京都古地図など ──

平成13年度附属図書館公開展示会は昨年寄贈を受けた『大塚京都図コレクション』の中から京都古地図を展示します。展示は総合博物館新館オープニングにあわせて、同企画展示室で開催します。

期間　：　平成13年６月１日（金）～６月30日（土）
休館　：　月曜日
場所　：　総合博物館　企画展示室（２階）

なお、開催期間中に文学研究科金田章裕教授による記念講演会を予定しています。

Web of Science　―文献検索のＩＴ革命―

工学研究科教授　吉　田　潤　一

1999年９月にドイツのある大学を訪問したときに私にとって衝撃的な出来事がありました。その大学というのはSiegenというフランクフルトの少し北にある、まわりを低い山で囲まれた地方都市の中核大学です。私の講演が終わった後、ホストをしていただいた教授の部屋でくつろいでいたときです。その教授は今総説を書いているところだといって、その書きかけの原稿をコンピュータの画面上で見せてくれました。そして、その次の瞬間文献検索ソフトを立ち上げ、今書いているところに関係する論文を瞬時に画面にリストアップし、しかもその中からとくに興味ある論文のところをクリックすると全文のデータがコンピュータに現れたのです。あなたの論文もすぐに出ますよといって、たちどころに私の論文を全文データとして出してくれました。その時はその検索ソフトが何だったか分かりませんでしたが、今から考えると、その１つが（目的によって複数のソフトを使いわけていた）Web of Science でした。その教授によるとそれらの検索ソフトや全文データベースは大学のすべての研究者が無料で使えるとのことで、大学や研究所がコンソーシアムのようなものをつくり、それが一括してそれらの検索ソフトや全文データベースのユーザーになっているので、その傘下にあるところではいつでも自由に使えるのだそうです。その当時私はCAS ONLINE での検索をいかに安く行うかに苦労していたので、夢のような環境に非常に驚いた次第です。このような環境と以前の図書館に通って文献を調べコピーするといった環境とでは総説を書くのに要する労力が10倍は違うのだとその教授は強調していましたが、もっと驚異的であったのは、そのような環境がドイツの各地で可能になっていることでした。現在はＩＴ革命の時代といわれていますが、これこそがＩＴ革命の最も明確でしかも有効な例ではないでしょうか。現代のコンピュータ情報技術をもって初めて可能になることを実現しているのです。

このWeb of Science は、欧米はもちろん中国や韓国、シンガポール、タイ、ホンコン、台湾などアジア各国の主要大学にすでに導入されています。日本でもいくつかの大学(九州大学、慶応大学、大阪市立大学、東京大学、琉球大学、九州工業大学、早稲田大学)や研究所(理化学研究所、全国全工技院、岡崎国立共同研究機構、全国農水省系研究所)で導入されているそうです。このような状況の中で、京都大学でもようやくその導入を求める声が高まり Web of Science が導入され、学生や研究者が自由に使えるようになりました。文献検索の分野でもやっとグローバル化の土俵に乗ることができ、ミサイルに対して竹槍で戦うようなことがなくなったといえるでしょう。

図１．Web of Science の検索結果の例　キーワード earthquake、著者 Rice, J. R. で検索した結果２番目の論文をクリックすると次の画面になる

Web of Science は一言でいうと論文の引用のリンクをたどることにより必要な文献を探し出したり研究の流れをつかむためのデータベース検索ソフトです。論文にはかならずといってよいほど引用があります。以前に書かれた論文がヒントになって新しいアイデアが浮かび、それを基に研究をまとめ論文にすることが多いわけですが、その時にはかならず基になった論文をいくつか引用します。その引用をたどることによって、どのような流れでその研究が発展してきたかがわかるのです。また、逆にその論文が他の論文にどのように引用されているかを知ることもできます。つまり、その論文以後に発表された論文でその論文を引用しているものをリストアップすることができます。この作業によってその論文がそれ以後の研究にどれくらいインパクトを与えているかがわかると同時に、その論文以後研究がどのように発展したかも調べることができます。また、このように論文の引用のリンクをたどることによって、従来見過ごしていた論文を発見し、そのことが新しい研究の展開につながることも大いに期待できます。

図２．Web of Science の論文表示画面　この論文が引用している論文数が44，この論文を引用している論文が11あることがわかる。前者をクリックすると次の画面になる

日頃インターネットでWWW（World Wide Web）を活用されている方はすでにお気づきのように、この Web of Science は WWW の考え方そのものを利用しています。リンクをどんどん手繰っていくということは、コンピュータなしには考えられません。Web of Science のもとになっているデータベースは Citation Index だそうですが、Web of Science と同等のことを冊子体の Citation Index をつかい手作業でしようとすると気の遠くなる時間がかかってしまいます。それがコンピュータ上でほとんど瞬間的にできてしまうのです。実は、Citation Index をつくった人は Web of Science のようなことを実現したくて始めたとのことで、コンピュータやネットワークが発達した今の時代になってやっとそれがかなったわけです。まさに、Web of Science はＩＴ革命から生まれたといえるのではないでしょうか。

図３．Web of Science の検索リスト　著者、雑誌名、巻数、ページ数、年　の順に表示される。それぞれの論文について図２のような内容表示を行うことができる。また、リンクしていれば（契約していれば）全文データを表示することもできる。

以前に京都大学でWeb of Science の試用期間があり、学内でもすでに使われた経験のある方も少なくないと思います。私の所属する専攻でその時の感想を集計したものからいくつかをご紹介しましょう。

Citation Indexのあまりの煩わしさに辟易としていたので、Web of Scienceのあまりの便利さに感激いたしました。今まで、年度ごとに調べていた、あの膨大な労力と時間は一体何だったのでしょうか。このように、研究の本質とは異なるところで消費する労力が減少するのは素晴らしいことだと思います。唯一不満が有るとすれば1975年（注：試用期間のときは1975年までしか使えなかったが、本来は1945年までのデータが入っている）より前の論文が見られないということだけでしょうか。調べたい文献は、古い物が多いのでそれだけがネックです。しかしそのような欠点は、この強力なツールの魅力の前には些細なことであります（学生）。

Related Referenceが関連文献を探すのに非常に使いやすくて便利です。手作業で探すのが不可能に近いだけに、この機能をインターネットで利用できる意義は大きいと思います（学生）。

Web of Science のトライアルを試させていただきました。自身の研究の引用件数、引用先が容易に検索できるだけでなく研究の流れを押さえることも可能であり我々の研究活動に非常にプラスになる検索システムであると思いました。研究の流れを正確に押さえる為にもデータベースは1970年前後から検索可能な大きさにしていただきたいと思います（教官）。

このように、Web of Science は学生や教官にとってほとんど抵抗なしに使え、すぐにそのメリットを享受できるものです。まだ使っておられない方も一度使ってみると、その魅力に取り憑かれるのではないでしょうか。しかし、まだまだ、京都大学としてこれから整備していかなくてはならないこともあります。その中で最も重要なことは、今回の契約が５年間分だけだということです。Web of Science のように引用をたどっていく場合には、古い文献のデータが使えることが不可欠です。Web of Science には1940年代からのデータが入っていますが、予算の関係で京都大学では当面、最近５年間分のデータだけしか使えないようです。新しい論文が引用されるのはそれ以後に発表された論文だけですから、古いデータが使えないということは、Web of Science の価値を半分以下にしてしまいます。図書費が年々逼迫している昨今ですが、早急に過去のすべてのデータが使えるようにすることが、今後の教育・研究の発展に必要不可欠ではないでしょうか。

（よしだ　じゅんいち）

印象深い大学図書館の先達たち

附属図書館事務部長　熊　谷　俊　夫

１．岸本英夫館長のこと（元東京大学附属図書館長）

今から3、40年前の国立大学図書館の多くは近代的とは程遠く、学生用の図書は極めて少なく、研究用に購入された図書の整理は滞貨として山と積まれ、わずかに保存図書館機能を部分的に果たしていたように思う。そのような時期に、東京大学にあって岸本英夫館長が就任され徹底的に東京大学の図書館改革に着手され、これが全国の大学に波及して大学図書館の改善、近代化に与えた刺激と影響は大きかった。当時、地方の大学図書館職員であった私にもその改善の動きは十分に伝わってきていた。

岸本英夫教授（宗教学）は昭和35年4月東京大学附属図書館長に就任したが、その6年前の昭和29年悪性腫瘍の病を宣告されていた。茅誠司総長から附属図書館長就任を懇請され、思い、悩み、米国の友人に相談し、その結果、茅総長から全幅の協力を惜しまないとの言質をとった上で承諾した。総長からもガン病の権威者である吉田富三教授の示唆により「月１回は必ず検査を受けること」の条件を付した。”図書館長への就任は図書館の改善を意味する。”との強い決意で全館員の陣頭に立ち東京大学図書館システムの大改革・大改善を指揮し、不治の病魔と闘いながら館長職に4年近く専心しその完成と同時に亡くなられた。まさに最後の生命を大学図書館の改善のため燃焼し尽くされたのであった。

岸本館長が東京大学図書館近代化のために行なった大改革は次の４つの柱である。

全学総合目録の編成が第一の改善事項である。

岸本館長は、大学の図書は何のためにあるのかとの疑問を持ち、図書は読まれるためにあるので無ければ意味がない。そのためにはどこにどんな図書があるか分かるようにしなければならないというところからユニオンカタログの編成事業が始まった。当時、東京大学には蔵書が約250万冊あり、200近い部局図書館室に分散されていた。目録は和洋の著者目録130万枚に収録されていたが、中央図書館には部局の図書の目録カードは配列されていなかった。

岸本館長は部局の目録カード70万枚を新たにコピーして編成する計画を立てた。しかし、まだ乾式のコピー機がほとんど無い時代であり、普通の方法では短時日では不可能であった。まず部局図書館室の目録カードをマイクロフィルムに撮影することとし、二組の職員撮影班を組織して１日に１～２千枚の目録カードをマイクロ化していった。フィルムを片端から航空便で米国ボストンにあるゼロックス社に送付した。ゼロックス社にはフィルムから特殊な輪転機でロールカードに印刷できる技術があった。印刷された膨大なロールカードは船便でパナマ運河を経由して横浜港に輸送され、そこからトラック便で東京大学に到着する計画である。最初のトラック便が中央図書館に到着したとき館内では丁度会議が開かれており、会議を中断して皆が馳せて入口に集まった。はるばる地球を半周してきた梱包荷物を見て何ともいいようのない深い感激を味わったという。70万枚の目録カード複製３カ年計画はわずか１年で終了した。

いま、京都大学の全蔵書580万冊のうち、入力されていない約310万冊を入力するまでには長い長い年月と経費を要する。短期間に遡及入力ができる抜本的な方法がないものか。

図書館組織体制の確立が第二の改善事項である。

全学の図書を全学の研究者が利用できるためには中央図書館（後に総合図書館）と200近い部局図書館室の相互の協力、連絡調整をする機構の設置が必要であった。先ず、附属図書館基本規則を制定し、全学図書館連絡会議を設置し、学内図書館相互利用の制度を促進し、図書は最も適切な部局に置かれるべきとの考えから専門図書の学内移管を行ない、中央図書館地下には全学共用の「保存書庫」を建設した。

さらに、専門情報の交換を目的として附属図書館月報『図書館の窓』を発刊した。月報は全学に散在する300人近い図書館職員を有機的に結ぶ働きを果たし、全国の大学図書館にも配布されこの改善事業の様子を伝えた。

指定図書制度の強化充実が第三の改善事項である。岸本館長は、“学生のための教育をこれほどまでに忘れて良いものか”という義憤を感じて指定図書制度の強化を図った。東京大学ではすでに指定図書制度が行なわれていたが、その本来の機能を果たしておらず、学生の教育にとって重要な指定図書制度の更なる充実のために、教官に対して広報を強化し、教官指定から利用までの迅速化と受入・整理業務の迅速化とを図り、専任掛を設置し、指定図書購入費の学内予算増額を図った。

指定図書購入費はまもなく文部省で新たに予算化され全国の国立大学図書館にも配分されることになった。

中央図書館の大改装、改修が第四の改善事項である。中央図書館は関東大震災の復興計画として寄付により建てられ、モニュメント的な性格の濃い建物であったが、これを利用者本位の機能的な近代図書館に改造した。建物の破壊と新たな建設が行なわれた。記念室が学生の一般閲覧室に変わり、参考室、開架図書室、専門別閲覧室、教官用専用個室・個席室、演習室ができ、書庫内には院生用に多数のキャレルが置かれた。

以上の改善事項のほかにも、文献複写、国際交換、貴重書管理の改善、停滞業務の打開や、東京大学では実施されていなかった館外貸出制度も開始させた。一連の改善策は東京大学図書館の近代化のみならず全国の大学図書館近代化の起爆剤となったのである。

この間、昭和38年には、ハーバード大学名誉館長K.D.Metcalf博士、副館長D.W.Bryant氏を招き、「大学図書館の近代化」について、全国各地で講演会、講習会、セミナーを開催し、自ら通訳を引受け、図書館関係者に多大な感激を与えた。また、新聞、雑誌に大学図書館近代化について執筆、その重要性を世論に訴えた。全国国立大学図書館長会議の会則を改正し機能強化を図った。以上の改革は何れも岸本館長の大学図書館に対する高い見識と愛情の深さを物語るものであった。

東京大学附属図書館改善記念式を昭和38年11月に挙行し、式辞の中で岸本館長は茅総長の熱意あるバックアップをはじめ協力頂いた関係者に深い感謝の意を述べた。1ヶ月後に入院そして昭和39年１月25日に逝去された。後を継いだ館長は、”原始林にブルドーザを駆って立派な道路を切り開いて”大学図書館の今後の進むべき方向を示したと称した。

ご遺族からの寄付金を基に記念基金が作られ、毎年の国立大学図書館協議会総会出席者からの寄付金を加え、『岸本賞』が設けられた。賞は国立大学附属図書館の図書館活動における功績、図書館情報学分野における業績のある職員に贈られる。現在は国立大学図書館協議会賞と改称されている。

２．吉岡孝治郎氏のこと（初代東北大学附属図書館事務長）

昭和43年頃、私は勤務していた大学で吉岡孝治郎氏の講演を聞いたことがある。吉岡氏は新制大学発足後の昭和24年初代の東北大学附属図書館事務長に就任し昭和32年末に退官しているので、すでに退官後しばらくしての時期になる。講演の中で、当時の日本の大学図書館は、欧米のそれに比べ40年以上の遅れがあるという言葉のみが耳に残った。前述の岸本館長、D.W.Bryant氏が述べていた言葉である。

吉岡氏は戦前早くから東北帝国大学附属図書館医科分館、すなわち医学図書館に長く勤務し、医学論文を海外図書館と積極的に交換を行なうなどその幅広いドキュメンテーション活動は、「吉岡理論」”Yoshioka Principle”とも呼ばれて図書館界では内外に有名であった。また、記録によると、昭和初めから戦後にかけて地区大学図書館協議会や医学関連の図書館協議会において、学術雑誌の地区内共同購入や学術雑誌の共同保存の議題を提起しており、今日いうところの大学図書館間コンソーシアム形成や共同保存図書館のことでありその慧眼に驚かされるのである。

しかし、さらに驚くのは外国雑誌の価格高騰問題に対して行なった行動である。いま、世界最大手の学術出版社エルゼビア・サイエンス社が販売する電子ジャーナルの日本に対する高額な価格と円価格政策は、わが国の大学にとって大きな問題であり諸団体からの強い抗議にも関わらず進展はない。

しかし、同様のことが70年程前にもあり、このときは吉岡氏等の貢献によって解決したのである。当時は、ドイツの医学や自然科学分野の雑誌高騰問題に関し、吉岡氏は英米の図書館関係者と密に連絡を取り合い対応策を協議し黙々と努力した。昭和10年（1935）５月マドリッドで開催された第2回国際図書館会議（International Congress of Library）は、ドイツ医学図書値下問題に関して討議され、日米が協力して共同声明を発表しこれにより解決をみた。昭和10年9月９日以降の輸入雑誌について、ドイツ政府の補償により25%引きを実現させたのである。この立役者は東北帝国大学附属図書館医科分館主任司書吉岡孝次郎氏とアイオワ大学のブラウン氏であり吉岡氏の精細な資料が役立ったのだという（河北新報1936.2.22）。この会議で日米仏独ノルウェーよる定期刊行書に関する特別委員会が設置され、吉岡氏は日本代表委員に推挙された。

吉岡氏が退いた後の60年代の東北大学図書館には国際的な雰囲気が強くあった。若手のＯ氏はフルブライトで海外留学、同僚Ｓ氏はミシガン大学図書館へ渡り10年余勤務して帰国。自宅を売却してその費用で海外図書館視察を行なった掛長もおられた。医学分館で吉岡氏の後輩にあたるＮ氏は管理職として以後多く図書館関係の国際的な場でも活躍された。これらはひとえに吉岡氏の国際的活動の影響であったろう。吉岡氏は図書館関係者としては初めての叙勲を昭和42年に受けておられる。

３．秦教勲館長（チンギョウフン、前ソウル大学校中央図書館長）

九州大学松原孝俊教授（言語文化部）は、永年ソウル大学校中央図書館に収蔵されていた旧京城帝国大学時代から引き継がれた蔵書の閲覧を申し出てきたが両国の微妙な感情もあり約20年間歴代館長から許諾が得られなかった。しかし平成７年に就任した秦教勲館長（西洋哲学）

は即座に「歴史的な経緯はともあれ、大学図書館に所蔵する蔵書は人類共通の財産である。必要な人に公開することが図書館の務め」との理想から利用を許可し、閲覧が実現したのである。早速、国文学関係研究者12人による九州大学古典籍調査団が結成されて平成10年所蔵悉皆調査が１週間にわたり行なわれ、江戸時代などの和本約３万冊の所蔵が確認された。中には類のない700点もの草双子や狂歌本200点のほか我が国に所蔵のない貴重資料などを含んでおり和古書3000点の目録が作成された。

その年の秋、秦館長が九州大学を訪問されることとなった。この機会に九州大学図書館で講演会の開催をお願いしたところ快諾され実現した。九州大学の歴史ある正門は近年普段は車を通さない開かずの門としていたが、杉岡洋一総長が今後外国からの要人を迎える際には正門から入構していただくとの計らいを決定していた。秦館長の来学はたまたまその第１号となり、ホテルに迎えて同乗していた私も正門を車で通り抜ける光栄に浴した。講演会は『情報化時代における韓日文化交流と大学図書館の役割について』と題して行なわれ、きわめて盛会裏に終了した。引き続き開催された電子図書館をテーマとする附属図書館研究開発室研究会においても秦館長の熱のこもった発表もあり討議は予定時間を大きく超えて終わった。

２ヶ月後、今度は我々がソウル大学校を訪問した。中央図書館６階フロアーには旧京城帝国大学時代に収集された約18万冊の東洋諸語を含む図書約30万冊が当時の分類順のまま配架されていた。日本の古い大学図書館の書架と何ら変わらない風景であった。気温と湿度の気候条件から虫害も全く無く、汚損も欠損もない極めて良好な状態で50年保存されていた。朝鮮戦争時には図書館職員がこれらの蔵書を遠い釜山まで苦労して疎開させ守ってきたのだと言う。

さらに２ヶ月後の平成11年３月末、京都大学に転勤する５日前であったが、九州大学図書館とソウル大学校中央図書館との図書館交流協定調印式に出席のため有川節夫館長とともに私は再びソウル大学校中央図書館を訪れた。秦教勲館長の閲覧許可の勇気ある英断から永く封印されていた研究資料が陽の目を見、斯界の研究促進と両国の相互理解、協力関係の構築へと発展し、いま、さらなる交流が重ねられている。秦館長は、日本の大学図書館の水準を超える電子図書館システムを構築し、また、貴重書の管理保全の改善などにも実にエネルギッシュに取り組んでおられた。一方で秦館長はとても気さくでやさしい紳士であり、日本の大相撲が大好きでいつも衛星放送で観戦していると車中で語っていたことが相撲放送を観るたびに思い出される。　（くまがい　としお）

参考文献

１）大学図書館の近代化をめざして：東京大学附属図書館改善記念論集／東京大学附属図書館編訳；第１集、第2集，東京大学附属図書館，1963
２）東京大学附属図書館月報『図書館の窓』，1巻‐3巻，1962.10‐1964.12
３）中村清　”独逸図書値下問題の経過と医科大学附属図書館協議会－特に吉岡孝次郎氏を中心として－”，『図書館雑誌』，30（2），昭和11年2月，45‐47
４）九州大学附属図書館報『図書館情報』，34（3）‐35（1），1998.12－1999.6

大学図書館と図書館員の将来

総合人間学部整理掛長　篠　原　俊　夫

まったく個人的感慨だが、うかうかと日を送っているうちに三十数年が経過し、自分でも信じられないままに間もなく大学図書館員としての終わりを迎える。もとより大層立派な動機があって図書館員になったわけでもなく、企業戦士としてまっとうできそうもないので、転身したというのが真相であるから偉そうな口をきける立場ではない。たまたま執筆の機会を与えられたので、あくまで私見として大学図書館と図書館員の過去と将来を考えてみたい。

自分の大学図書館員としての履歴は、自分の選択による部分もあるが組織の一員として意志や希望に関わりなく形成される部分もある。これは誰にも避けがたいことで一概にいいとも悪いとも言い難い。私の場合、平均して一つの掛に３年ほどいて異動を繰り返している。整理業務のほうにやや偏りはあるが、附属図書館や医学図書館の運用部門も経験した。文系と理系ということで言えば、文系に偏りはあるが、滋賀医大を含む医学図書館の９年間の経験はある意味で新鮮であった。正直に言えば理系のある種の明晰さ、単純さのようなものが驚きであった。理系図書館を経験することも悪くないという実感があった。食わず嫌いが恐る恐る食べたものが意外に美味であったというのに似ている。

一般に図書館員が理系の図書館を敬遠したがるのは、主題知識の無さからくる漠然とした不安が原因である。シソーラス に目をくれながら、猛スピードでパソコンのキーを叩くベテラン医学図書館員の姿は文系図書館から移ってきた中年図書館員をして気後れを感じさせる迫力があった。検索に要する時間が経費として利用者に跳ね返るシステムである以上、如何に素早く能率的に、かつ遺漏なく情報を取り出すかが有能な図書館員たることの証であった。熟練していなければ、果てしなく経費が加算されそうなシステムを目前にして、なるほど情報の仲介者としての図書館員の役割は不滅かも知れないと、今にして思えば誠に安易な幻想を抱いていた。私が医学図書館を離れるころにはＣＤ－ＲＯＭが普及し始め、同じ内容の検索が時間にせかされることなく利用者自身が、しかも直接の経費負担をせずしてできるようになった。無論、情報のナビゲーターとしての図書館員の役割はより高度なマネージメントの方向に転移したと考えればいいのだろうから、お役御免というわけではない。ただ、現在の仕事の内容から将来を予測することは不可能であることを実感した。目前の技術を拾得することは必要である。しかし、十分条件を満たしているとは言えない。

芭蕉が俳論のなかで不易流行という言葉を使っていることはよく知られている。一言で言えば、優れた俳句は新しい流行、風俗を直ちに読み込む一面と、ゆるぎ無い伝統を踏まえた一面の両面から成り立つものであり、そのいずれを欠いても俳句としての要件をみたさないという意味である。図書館についても同じことが言えるのではないか。コンピューターの進化を見れば一目瞭然だが、技術は予測を超えた速度で進化し、発展する。しかし図書館情報学のバックグラウンドをなす伝統的な理論の裏付けがあってはじめてトータルな図書館と図書館員像が存在すると言える。時代が変わって技術の表層がどう変わっても変わることのない図書館員のバックボーンをどう形成するか。難しいことだが、先人達が苦闘し積み上げてきたものを誠実に検討し、受け継ぐべきものを正しく受け継いで行くことがなければならないと思う。ただし私個人について言えば、それができなかったという苦い反省ばかりが残ってしまうのだが、今となっては仕方がない。

（しのはら　としお）

アメリカ大学図書館の旅②
―コロンビア大学ほか―

附属図書館情報サービス課参考調査掛　後　藤　慶　太

前回は、ハーバード大学をご紹介しましたが、本稿では、コロンビア大学とNCC、CEALという２つの研究会議についてご紹介します。

１．コロンビア大学

http://www.columbia.edu/

コロンビア大学は、1754年、イギリス国王ジョージ２世の勅許によりキングス・カレッジ（King's College）として創設されました。数度の移転を経て、現在のニューヨーク市、マンハッタンの北西部、モーニングサイド・ハイツに落ち着いたのが1897年のことで、その間に、キングス・カレッジからコロンビア大学に名称も改められました。昨年秋、日本人の某人気歌手が飛び級で入学したということもあって、日本では、コロンビア大学という名前は一般にもかなり浸透しているのではないでしょうか。

コロンビア大学の図書館は併せて20以上あり、蔵書数は700万冊を越え、全米で第８位ということです。訪問の際は、C.V.スター東アジア図書館（C. V. Starr East Asian Library）の館長であるAmy V. Heinrichさんにご説明・ご案内いただきました。また、訪問依頼の段階で、日本研究担当のライブラリアン三木身保子さんにお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

① C.V.スター東アジア図書館

http://www.columbia.edu/cu/lweb/indiv/eastasian/

ハーバード大学イェンチン図書館と同様、東アジアコレクションでは全米屈指の図書館で、東アジア以外の地域では５本の指に入るそうです。70万冊に迫る蔵書を持っており、雑誌も4,000タイトル以上あります。

まずは館内をご案内いただきました。天井が高く、重厚な佇まいはいかにもアメリカの図書館らしく、思わず唸ってしまいましたが、お世辞にもきれいとは言えませんし、スペース的にも十分とは思えません。端末などもどうにか置き場所を見つけたという感じです。特に、書庫の狭隘さ・使いにくさについてはAmyさんも嘆いておられました。

C.V.スター東アジア図書館

目録の遡及入力は、90%（2000年３月時点。現在、ホームページを見ると95%になっています）まで済み、2002年にはすべて終了するだろうということです。ちなみに、コロンビア大学図書館の検索システムはCLIO（Columbia Libraries Information Online）と言い、基本的には、1981年以降のデータが検索できます。

ところで、この図書館はノーチェックで誰でも入れるようになっています。しかし、Amyさんの話によれば、学外者の利用が増え、コロンビアの学生達に十分に使ってもらえないような状況になっているらしく、遠からず、IDがなければ入れないような仕組みにしたいとのことでした。ある旅行案内書には、“日本の主な新聞や雑誌が置いてあり、一般にも開放されているので、日本の情報が恋しくなったらここに来るといい”というアドバイスが書いてありますが、はたして今後どうなるのでしょうか。

（まったくの余談です。帰国後、顔なじみの招聘外国人学者の方が来られました。そして、私

が東アジア図書館を訪問したことを聞き、とても喜ばれました。彼は、コロンビア大学で学位を取得し、在学中、東アジア図書館をよく利用していたということでした。しばし、２人で盛り上がったことは言うまでもありません。世界は広いような、狭いような…。）

② バトラー図書館

http://www.columbia.edu/cu/lweb/indiv/butler/

歴史、文学、宗教など人文科学系を中心とした200万冊の蔵書を誇るコロンビア大学最大の、いわば中央館的な存在の図書館です。その偉容はハーバード大学ワイドナー図書館を彷彿とさせ、同じように古代ギリシアの宮殿を連想させる巨大な石柱が何本も立ち並ぶ建物です。Standard Oil社の経営者にして慈善家のEdward S. Harknessの寄付により1934年に、“South Hall”として開館しましたが、1946年に、40年以上の長きにわたってコロンビア大学の学長職にあったNicholas Murray Butlerに因んで改名されました。

バトラー図書館

内部は、天井の高い閲覧室がいくつもあり、かなりの広さです。そして、CCNMTL（後述）などバトラー図書館のサービスの範疇にない部署がいくつか入っていて、あたかも複合施設のようになっています。そして、老朽化した設備の更新やネットワーク化への対応を含め、1995年から大規模な修繕工事が始まっています。

館内の施設で感嘆したのは、やはり“Reserves”（指定図書）でした。どんな資料がReservesにあるかは、ホームページで公開されています。

さて、私にはどうしても知っておきたいことがありました。コロンビア大学を訪問したかった一番の理由と言っても過言ではありません。図書館学を学ぶとたいてい、“デューイ（Melvil Dewey）が世界で初めてコロンビア大学に図書館員養成のための図書館学校を開いた”ということを習います。これが先般の不況下、閉鎖されたという報に接しました。それからしばらく経ちますが、その後、この図書館学校がどうなったのか気になっていたので、ぜひお聞きしたいとメールでもお伝えしていました。Amyさんは私を305番の部屋の前に連れて行き、「図書館学校は以前ここにありました」とおっしゃいました。今は、Electronic Text Serviceという部署になっています。「なぜ再開されないのでしょうか？」とお尋ねすると、「なぜだか…。私にもわからない」とお答えになりました。

③ Columbia Center for New Media Teaching and Learning（CCNMTL）

http://ccnmtl.columbia.edu/

ここは、バトラー図書館の204番の部屋にありますが、図書館に付属するものではなく、独立した部署です。ニューメディアとデジタル技術をコロンビア大学の教育に積極的に活用することによって、これまでにない授業の形態や新しい教材を創り出すサポートをします。教員達への最新技術の紹介やソフトウェアの講習、技術を活用した授業プランおよび教材作成の相談・援助、さまざまなワークショップの開催、そしてそれらを可能にするための数多くのツール（PC、スキャナー、プリンター、ソフトウェア、メディア作成機器等）と充実したスタッフが用意されています。

ちょうどこの部屋にいたスタッフにいくつかデモを見せていただきました。例えば、２枚の絵画を比較するために、Web上で２つの画面を並べて開いて、詳細に比較・検討することができます。必要ならば、動画や音声をリンクさせ、関連するものを参照したり、解説やポイン

トを聴いたりすることもできます。また、現物や美術書のようなものであれば、多くの学生が同時に観察することはできませんが、web教材ならそれも可能になります。私が、「これは先生にとっても、学生にとってもすばらしいシステムだと思います」と彼女に言うと、「本当？私たちもとても良いシステムだと思うわ」と笑顔で答えられました。自分たちの仕事が、コロンビア大学の教育にいかに貢献しているかという自信に満ち溢れた笑顔に見えました。（ホームページで、授業教材のサンプルを見ることができます。）

CCNMTL内部の様子

２．NCC／CEAL

研修期間の後半には、NCC（North American Coordinating Council on Japanese Library Resources；http://www.lib.duke.edu/ias/eac/ncc/）とCEAL（Council on East Asian Libraries；http://staff.washington.edu/rrbritt/ceal/）という研究会議に参加しました。紙幅に余裕もないので詳細はホームページをご覧いただくとして、私は今回、CEALの分科会Committee on Japanese Materialsにて、“Scanned Image Data of Rare Materials for the Kyoto University Digital Library”と題する発表を行うという幸運に恵まれました。これは、ハーバード大学の山田さんからの提案をお受けする形で実現したものですが、実際の発表に当たっては、原稿の英訳から当日の設定まで委員長の森本さん（University of California Berkeley）に大変お世話になりました。４本の発表や委員会報告などが矢継ぎ早に行われ、質疑応答の時間もわずかだったため、私の発表に対する質問や感想をいただくことができず、その点が心残りでした。京大電子図書館は、海外における日本研究にとって有用なものなのでしょうか。当初抱いていた疑問は未だ疑問のまま残さざるを得ません。

３．おわりに

私にとっては初めてのアメリカ旅行、しかも一人旅ということでとても不安でしたが、過ぎてしまえば、あっという間の２週間でした。ハーバードやコロンビア以外にも、UCSD（University of California San Diego）やUCLA（University of California Los Angeles）の図書館、ボストン公共図書館（Boston Public Library）、ニューヨーク公共図書館（New York Public Library）なども訪問でき、それぞれに深い感銘を受けました。それから、NCCにおける活発な議論－ILL、国際協力、著作権、人材育成等いくつかのトピックごとに、今後10年間で何に重点を置いて取り組むかということについて全員で意見を出し合い、一定の方向を決めていく姿を目の当たりにして、今まで単純にアメリカの図書館やライブラリアンを羨ましく思ってきた自分が恥ずかしくなりました。専門職としての地位は一日にして成らず、また永久に不滅のものでもないのです。（「ライブラリアンは専門職とは言え、ランクは低い方で、給料もそれほど高くありません」とは山田さんの弁です。）

軽々に日米を比較するようなことはしたくありませんが、それでも歴然とした差は存在するように感じます。京大図書館に一番足らないものは…？何のために、誰のために、どんな図書館サービスを、どのようなポリシーのもとに展開するかという根本的な目的・目標、構想、方向性や使命（mission）でしょう。人員は削減され、予算は縮小され、疲れて余裕のない図書館員と先人が残してくれた古い資料等の財産でどうにか食いつないでいるように見えます。

「百聞は一見にしかず」と言いますが、実際

にアメリカに行ってみて本当に貴重な経験をさせていただきましたし、考えさせられるところもいろいろありました。最後になりましたが、お世話いただいたみなさまに改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（ごとう　けいた）

附属図書館に『京都古地図コレクション』の寄贈

このほど附属図書館では、京都市上京区在住の大塚隆氏から、『京都古地図コレクション』の寄贈を受けた。寄贈を受けた古地図は、江戸期から近代に至る京都に関する地図の唯一といえる体系的コレクションである。総数は470余枚に及び、そのうち280枚は江戸期及び明治期前半に作製されたものである。

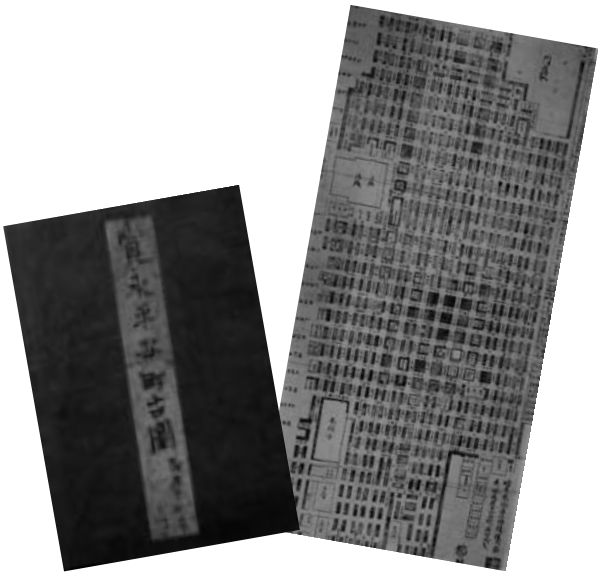
コレクションの中には、江戸期に印刷された現存する本邦最古の京都市街図である『都記』（みやこのき）、通称『寛永平安町古圖』（刊年、版元不明）が含まれている。蔵書印からこれまでに何人かの所有者の手を経たことがわかるが、中には木村兼葭堂・富岡鉄斎の蔵書印も見える。これは重要文化財にも匹敵するものと言われている。江戸期京都図の版元を代表する林吉永・竹原好兵衛など主要な版をほとんど網羅している。

また、同じ版でも手書きで彩色されたもの、彩色印刷されたものがあるなど、比較して見ると興味深い地図が沢山ある。町中を子細に眺めると、正面通りの東詰に大仏があったことが分かるほか、現在に残る通りの名前があり、改めて京都の長い歴史を感じさせる。周辺に目を転ずると、三井寺を表すためか琵琶湖が描かれている地図もある。

これらは、人文・社会科学分野のみならず、広範囲の研究者にとって第一級の学術研究資料であり、今後の研究者による活用が大いに期待されるところである。

このコレクションは、金田章裕文学研究科教授の永年にわたる同コレクションに関する研究を縁として寄贈に至ったものであり、寄贈者の大塚隆氏に対して、平成12年12月19日（火）総長室において、佐々木丞平附属図書館長、金田章裕文学研究科教授、熊谷俊夫附属図書館事務部長等の出席のもと、長尾眞総長から感謝状の贈呈が行われた。

附属図書館ではこの古地図を『大塚京都図コレクション』として貴重図書に指定し、整理・保存していくだけでなく、図録の作成、公開展示会の開催のほか、現在推進している「電子図書館システム」によるネットワーク上でも公開することにより、広く利用していただくことも計画している。



京都大学図書館百年

新村出先生宛の絵葉書

奥　山　智　靖

その絵葉書は『南紀土俗資料』という本にはさまれて眠っていた。現在、私は図書館内の一室で「遡及入力」の一端を担っている。いつもと変わらぬ仕事を繰り返していた2000年初冬のある日のこと、何やら絵葉書らしきものが出てきたのだ。新村出先生、はて？その時、同僚の言葉が胸に突き刺さる。「え、奥山君、図書館員志望なのに新村出さんのことも知らないの。『広辞苑』の生みの親だよ。」

絵葉書発見の報せを現物を携え、掛の部屋に行った時の皆の反応が普段とはまた違っていた。どうやらよほど「京大的」に貴重なものを発見したらしいということだけは何となく伝わってきた。このままではいけない、そんな想いが頭の中を駆け巡り、新村出先生のことを調べさせる決心をさせた。

定石通り私は人名辞典にあたることから始めた。図書館所有の資料の中で有効と思われたのは次の３点。日外アソシエーツから出ている『現代日本執筆者大事典』及び『伝評・評伝全情報45／89』、三省堂の『コンサイス人名辞典』。その中から私は息子猛氏の手による『「広辞苑」物語』と紀田順一郎氏の著『名著の伝記』を頼りに時代背景をみていくことにした。

吉田神社近くのとある食堂で定食をほおばりながら読んだ『「広辞苑」物語』は感動ものであった。辞書そのものよりも辞書の生成過程に興味がある私にとって、この本はまさにうってつけであった。

『「広辞苑」物語』によると新村出先生は明治44年10月附属図書館長に着任され、発見した絵葉書には日付が（２年３月25日）とあるので、『南紀土俗資料』の発行年次大正13年と合わせて昭和と見るのが妥当であろう。裏の写真は大正・昭和初期から流行した当地名所シリーズか。今はなき『写楽』※[1]の特集で読んだ記憶がある。昔は金子の催促を絵葉書でやるという行為自体珍しくなかったと聞く。武蔵温泉とあるから、九州在住の人が実父関口孝吉氏が山口県令を勤めた時代の関わりで出したのであろうか。また、新村先生はこの絵葉書をどんなおもいで受け取ってこの本にはさみ込んだのだろうか。

『名著の伝記』には以下の面白いくだりがあった。まず新村出先生が映画『雁』※[2]を見て以来高峰秀子の熱烈なファンとなり、玄関から居間までポスターを貼っていたこと、『広辞苑』が戸塚文子氏により朝日新聞の連載「一冊の本」において取り上げられたのは辞書としては異例だったこと、宮尾登美子氏が蔵書のいっさいを手離しても『広辞苑』だけは手離さなかったこと等々。最後に紀田氏は、新村出先生のことを評して「<辞書英雄時代>の最後を飾る存在として登場し、新しい情報化社会の辞書への橋渡しをなしとげた」と結んでいる。

広辞苑ひもとき見るにスモッグと
いふ語なかりき入るべきものを（白芙蓉）

昨今日本語の危機が叫ばれて久しい。昨年あるニュース番組で、森首相の発言に対して「お灸を据える」という言葉をあてたことに鍼灸関係者が反発し、治療行為以外に使ってくれるなとマスコミ各社に要望したという一幕が取り上げられていた。※3

時を遡ること昭和22年元日、時の吉田茂首相がラジオ放送で労働組合の闘争を評して「不逞の輩」のすることと非難、大変な物議を醸した。その時、新村出先生は氏独特の関心の寄せ方を示している。それは『老人随筆・不逞録』と題するノートになって残っているが、それによると元日以降の新聞の関係記事の切抜が貼られ、ところどころ「ふてい」の部分に朱筆がふられていたという。

新村先生のこだわりは「不逞」を30数種類の辞書、古今の国語辞典漢和辞典はもとより、和英・和仏・和独等に及んだという。新村先生なら「お灸を据える」という表現にいかなる反応を示されたであろうか、そんなことを想像してみただけでも楽しい。

余談になるが、私の母校愛知県立大学附属図書館には息子新村猛先生が寄贈された図書をもとにした新村文庫がある。そこで育った人間が、縁あって京都大学に来て、父君新村出先生宛の絵葉書を発見したということにまた不思議なものを感じる。

（おくやま　ともやす：附属図書館遡及入力室）

※1『写楽』22号（3巻3号）：1982　515-529pp.
※2『雁』：豊田四郎監督、1953
※3 筒井康隆　朝日新聞2001/2/5 21面

図書館の動き

京都大学図書館システムの在り方検討委員会を設置

平成13年１月30日に開かれた商議会において「京都大学図書館システムの在り方に関する検討委員会」が設置されました。第１回委員会は２月22日行われました。

大学改革の一環として、京都大学の図書館システムの見直しを図る必要が生じたことから、この委員会では、附属図書館と各部局図書館・室の機能、連携の在り方等について検討し、本年７月までに結論を出す予定です。

古文献資料専門委員会を設置

本学附属図書館は、創立時から貴重な古文献資料を積極的な寄贈依頼等によって収集に努めてきており、所蔵する古文献資料群は、国内の図書館の中でも質量ともに極めて優れた研究資料となっています。最近においても一般市民から貴重なコレクションの寄贈があるなど、本学附属図書館に対する古文献資料の保存への期待も大きいものがあります。附属図書館としてもこの期待に応えるため、本学が収集する貴重な古文献資料の収集計画、所蔵する古文献資料の管理、保存、目録作成、公開等の有り方についての検討を促進し、所蔵する古文献資料に関して更なる研究が促進される必要があります。このことから、平成13年1月30日開催の附属図書館商議会において「古文献資料専門委員会」を設置し、委員12名が指名されました。同専門委員会は、古文献資料に関し大学としての収集計画の立案、所蔵古文献資料の管理、運用、電子化、修復、書誌作成等のあり方について検討します。また、貴重書の指定審査及び指定解除もこの委員会のもとで行なうこととなりました。

宮崎滞欧採蒐コレクションが寄贈される

宮崎市定博士（1901―1995）旧蔵の洋書177冊、地図90点が長女の宮崎和枝様の申し出により、京都大学附属図書館へ寄贈されることになり、平成13年２月５日に搬入されました。今回は昨年の「大塚京都図コレクション」に続いて、貴重な西洋古版地図等が寄贈されたことになります。このコレクションの中には、博士がヨーロッパで蒐集された1561年刊行のヴェネチア版『プトレミー地図帳』や1550年に木版筆彩された『ミュンスターの新世界図』などが含まれています。

索引誌SCI等のオンライン版Web of Science導入

本学において、いよいよ Web of Science が使えることになりました。これは、索引誌として刊行されている Science Citation Index , Social Science Citation Index , Arts & Humanities Citation Index のオンライン版で、その機能の高さと使い勝手の良さから導入が待望されていたものです。このたび学長裁量経費の措置を受けて導入が実現いたしました。

すでにご存じの通り、Citation Index（引用索引）は単に論文を検索するものではなく、引用関係を通して論文と論文とのつながりを調査するためのツールです。これにより、研究の流れの把握や、特定の論文のインパクトを評価するなど、他にはない機能を持っています。Web of Science は、このような高度な機能を、ブラウザを通して簡単な操作で利用できるようにしたもので、まさに学術研究に必須のツールと言って過言ではありません。

Web of Science は、皆様の研究活動に寄与するものと確信しております。大いにご活用くださいますようお願いいたします。

なお今回の導入は、学長裁量経費による試験的な導入です。しかし本学にとって、Web of Science の重要性は計りしれません。附属図書館といたしましては、来年度以降も継続して使用していただけるよう努力してまいりたいと考えております。皆様方のご支持ご協力を賜りますようお願いいたします。（本誌６－10頁　吉田潤一『Web of Science　文献検索のIT革命』参照）

附属図書館に自動貸出返却装置が入る

平成13年４月６日より、附属図書館メインカウンターに自動貸出返却装置２台が設置されます。これにより利用者がセルフサービスで利用証と図書を装置にセットすることにより貸出返却を行うことができます。

新図書館利用証の交付

平成13年４月６日より図書館利用証がプラスチック製磁気カードに変わります。これに伴い新利用証の申請・交付を玄関入り口の受付カウンターで行います。

なお、教職員（常勤）、学部生、院生の方は、新たに交付されます教職員証・学生証が、自動的に新利用証になります。

『2000年京都電子図書館国際会議報告書』が刊行（日本語セッション）

平成12年11月13日から17日にかけて開かれた京都大学、英国図書館、米国国立科学財団主催の「京都電子図書館国際会議」の会議録が３月に刊行されます。

この会議録は『2000年京都電子図書館国際会議報告集』（日本語セッション）として日本図書館協会から発行、発売されます。なお、英語版はIEEE Computer Society Pressから刊行される予定です。

教官寄贈図書一覧（平成12年11月～平成13年1月）

所属等	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
総長	長尾　真	商事法学　招待	法文社	2000
総長	長尾　真	叡知の飛翔　NEDO 20 年	新エネルギー産業技術総合開発機構	2000
人環教授	伊從　勉	図学　上・下　増補改訂版	ナカニシヤ出版	1996
農学部助教授	二井一禎	森林微生物生態学	朝倉書店	2000
教育学部教授	山田洋子	私をつつむ母なるもの	有斐閣	1988
教育学部教授	山田洋子	人生を物語る	ミネルヴァ書房	2000
教育学部教授	山田洋子	ことばの前ことば	新曜社	1987
館長	佐々木丞平	参勤交代行列絵図	(社)霞会館	2000
総長	長尾　真	国立大学協会 50 年史	国立大学協会	2000
法学部助教授	中西　寛	Guardians of Empire	The Uni of North Carolina Press	1997
総長	長尾　真	(社)全国日本学士会創立 50 周年記念史	(社)全国日本学士会	1998
農学部教授	林　力丸	高圧バイオサイエンスとバイオテクノロジー	さんえい出版	2000
総長	長尾　真	インターネット情報流通技術	オーム社	2000
経済学部教授	渡邉　尚 今久保幸生	ヨーロッパの発見	有斐閣	2000
名誉教授	大塚香代	身近な数学	大塚香代	1998
人文研助教授	高階絵里加	異界の海	美術の図書三好企画	2000
総人教授	宮本盛太郎	夏目漱石―思想の比較と未知の探究	ミネルヴァ書房	2000
総長	長尾　真	Biblotheca Codicum Asiaticorum	The British Library	1998
人文研助手	瀧井一博	ドイツ国家学と明治国制	ミネルヴァ書房	1999
人文研教授	佐々木　克	江戸が東京になった日	講談社	2001
人文研教授	山室信一	近代日本における東アジア問題	吉川弘文館	2001
文学部教授	礪波　護	東西交渉史論	中央公論社	1998
文学部教授	礪波　護	日出づる国と日暮るる処	中央公論社	1997

目　　次

◎フォン・シーボルトと『ファウナ・ヤポニカ』 ―― 1
◎Web of Science　文献検索のIT革命 ―― 6
◎印象深い大学図書館の先達たち ―― 9
◎大学図書館と図書館員の将来 ―― 13
◎アメリカ大学図書館の旅② ―― 14
◎附属図書館に「京都古地図コレクション」の寄贈 ―― 17
◎京都大学図書館百年　新村出先生宛の絵葉書 ―― 18
◎図書館の動き ―― 19
◎教官寄贈図書一覧（平成12年11月～平成13年1月） ―― 21

お 詫 び

静脩第37巻３号の記事に誤りがありましたので、お詫び申し上げます。下記の要領にて訂正いたします。

頁　等	誤　り	訂　正
14p下から２行目	助手　日野龍夫　成島龍北　…	教授　日野龍夫　成島柳北　…
18p（表）「２．依頼件数」	所蔵調査　事項調査　その他	所蔵調査　事項調査　合計
18p下から４行目	４．学内者・学内者別利用件数	４．学内者・学外者別利用件数
19p（表）「現物貸借５年間推移」の最下段	貸出―謝絶　106　131　174　…	借用―謝絶　106　131　174　…
19p下から10行目	３．文研複写	３．文献複写
20p上から１行目	文研複写（国内）５年間推移	文献複写（国内）５年間推移
21p左側最下段	依頼が約400件	依頼が約1,700件

編集後記

京都という地域の利点を大いに活用して古文献資料を収集するために、商議会のもとに「専門委員会」が発足した。その第１回会議では京都大学古文献資料の現状が報告された。附属図書館所蔵の国宝、重要文化財、特殊文庫の他に、文学部の「田中美知太郎文庫」、法学部の「Thaner 文庫」経済学部の「財部文庫」、薬学部の本草コレクション等々が紹介された。『静脩』では創刊以来これらの資料についての紹介記事が掲載されてる。改めて、資料を知るための記事がいかに大切かを痛感した次第である。（G）

京都大学附属図書館報「静脩」Vol.37 No.4（通巻138号）2001年3月31日発行　編集：静脩編集委員会
（責任者：附属図書館事務部長）発行：京都大学附属図書館　京都市左京区吉田本町　Tel.075-753-2613